

角川源義賞「文学研究部門」選考委員会より

## 書誌学の拓く文学研究の新たな展望

原岡文子

日本古典文学研究の閉塞状況が意識されるようになって既に久しい。こうした危機意識を踏まえ、その突破口として、とりわけ中古から中世の作品を射程に、「書誌学」と「文学研究」の統合によって、新たに拓かれる研究の壮大な展望を提示するのが、佐々木孝浩氏の『日本古典書誌学論』である。

序論には、まず平安末から鎌倉期にかけて出揃った五種類の和本の装丁、「卷子装」、「折本」、「粘葉装」、「綴葉装」、「袋綴」について、その形態と歴史が明快に提示される。作品の器としての書物の形態、装丁は、やや特殊な二つを除き、最も格の高い「卷子装」から「綴葉装」、「袋綴」の順で実は明確な使い分け、ヒエラルキーを有するという。文字情報としての本の形態と、収められる作品の性格、内容との相関が、こうして鮮やかに

示される時、客観的で手堅く完結する居すまいの書誌学が、作品内容に共振するものとして新たに立ち上がることに驚きを覚えずにはいられない。

勅撰和歌集の奏覧本は、だからこそ最も格の高い卷子装となることが、故実資料、写本の実態調査から論じられ、奏覧本本文のわけてもの価値の高さの蓋然性が浮かび上がる。あるいは卷子本に書写される和歌や漢詩文とは異なり、物語が原則的に冊子体だったこと、けれど『大鏡』等の歴史物語は卷子装ともなり得たことなど、往時のジャンル、その格付けと装丁との相関の指摘は多岐にわたる。また従来『源氏物語』本文の最善本とされてきた大島本の再検討は、袋綴の写本の、綴穴、蔵書印の有無、という形への着目に発し、これを新旧二つのグループから成る取り合わせ本と結論づけるもので、投じられた一石の衝撃には小さからぬものがある。大島本に客観的で着実な再検証が今後さらに求められることは疑いあるまい。極めて具体的な器の形を手がかりに、豊かな経験と該博な知識に基づき多様なジャンルを縦横に論じる本書は、幅広い読者に上質な推理小説にも似た愉楽をもたらす。書誌学との出会いに導かれる読みの更新がさらに待望されよう。